

2020 The New Earth

A travel report

——ネイサンの物語——

1. 浜辺の出来事

6月のある日、僕たちは猛暑の中にいた。焼け付くような日射しだったが、僕は数人の友人と海にいたため、暑さは気にならなかった。むしろ、その暑さが、僕らが度々海水に身を浸し、自由な時間を楽しむよう誘ってくれた。ストレスのない休日。世界はOKに見えたし、それ以外の見方をすることに何の興味もなかった。友人たちの方に目をやると、彼らは水の中で、見るからに楽しげに遊んでいた。

「人生は素晴らしい！」それからひそかに思った。「なぜ、いつもこんな風じゃないのだろうか？」

僕は目を閉じて背を反らせた。「太陽よ照りつけておくれ。燦々と頼むよ！」しばらくして目を開けた。僕の体を優しくなでてくれる涼やかな風に、僕は微笑んでいた。体を起こすと軽く目眩がした。あったはずの水筒がない。僕のバッグもだ！ それから友人たちもいなくなっていることに気付いた。「大した冗談だな」そう思って立ち上がり、あたりを見回すと、友人どころか、**誰も**ビーチにいないことがだんだんわかってきた。

僕たちは、このビーチが旅行者に知られていないから気に入っていたのだが、それでも奇妙なことだ。30分前にバナナの皮を捨てたゴミ箱もなくなっている。僕の周りは**緑色**だらけになっていた！僕は夢を見ているのか？これは現実か？

太陽は、先ほどと同じくやはり照りつけているし、海もそこにある。泳ぐために海水に入った。少しの間混乱を忘れたいたいという思いに駆られたのだ。ところが、海の中から浜辺や島を見て、僕はショックを受けた。僕はどこにいるのだろうか？山々の稜線は確認できるが、以前とはまったく違って見えるのだ。いつもの、乾ききったような夏の景色が、今はすべて緑色なのだ。その島に何世紀も無かったはずの森が見える。僕は過去にいるの？タイムトラベルしたのだろうか？夢に違いない。でも、何もかもあまりにも現実的だ！

僕はゆっくりと泳いで浜辺に戻った。水は腰の高さしかなかったが、砂が僕のお腹をくすぐるまで、泳いだ。僕はそこでワニのように横たわり、動かないまま、辺りを目で窺っていた。自分が何を探しているのかさえわからない。何か、何かあるはずだ。僕が今見ているものに説明がつくものが。それは僕の混乱した頭をすっきりさせてくれるだろう。気分が悪いわけでも、怖いわけでもない。僕の感覚は完全に研ぎ澄まされている。僕はゆっくり立ち上がり、僕がタオルを置いた場所に歩いて行く。僕は用心しながらそれを拾い上げる。何か起きてくれることを期待しながら。けれども何も起こらない。いつもタオルが拾われるときのようようにタオルは拾われた。僕はタオルを肩に掛け、駐車場に歩いて行く。だんだん、これが悪ふざけじゃないことがわかってきたが、それでもそこに友人たちがいることを願った。そこに駐車場がないことを僕にはなかなか受け入れられなかった。その場所はあるのだが、植物が生い茂っており、その中央には焚き火台がある。そばに行って灰に指を突っ込むと火傷した。ついさっきまで誰かがここにいたに違いない。燃え殻がまだ赤い。

「こんにちは？ 誰かここにいますか？コーンーニーチーワー！」ためらいながら声をかけてから、今度は精一杯声を張り上げる。「コーーんーニーーチーーワーー！！！」僕の声に驚いた鳥が、木々の間から数羽飛び立っただけだ。「ここで何が起きているのだろうか？」声に出して自分に聞いてみる。すると、僕の質問に答えるように、カモメが頭上でうるさく鳴いた。まるで僕の知ら

ない何かを知っているかのように。見上げると、カモメが島の中心に飛んで行くのが見えた。何の考えもないまま、足が勝手に歩き始め、僕はカモメを追う。カモメが視界から消え、僕は駐車場から通り道に出る。1時間前に通った道も、やはり前と違っている。同じ道だが、僕の周りの何もかもが緑に染まっているのだ。数百メートル歩いてから気付いたのだが、ただ緑が濃くなっているだけではなく、周りの植物がすべて実をつけている。熟した果実、未熟な果実がたくさん実っていて、どれもみんな食べられるものだ！僕は、ブラックベリーの茂みのところで立ち止まった。よく熟れた果実がたわわに実っている。その藪の中央から、イチジクの木が突き出ている。僕は喉が渴いていたのを思い出し、水筒もなくしていたので、いくつつまんで食べた。ああ、なんてうまいんだ！ジュースが僕の喉をなだめるように下りていく。少しの間、僕は他のことを忘れていられた。イチジクがこんなにジューシーだとは知らなかった。イチジクは甘くてジューシーだ。